紙ストロー生産機「STO-001」発表

ミヤコシ “国産初の製品”で環境問題に貢献

㈱ミヤコシ（千葉県習志野市津田沼、宮腰亨社長、☎047・493・3854）はこのほど、紙ストロー生産機「STO－001」を発表。10月23日と24日、千葉県八千代市大和田新田のPOD開発事業部で内覧会を開催し、220人が来場した。

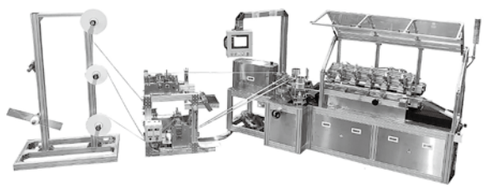
冒頭、あいさつに立った宮腰社長は「ウミガメの鼻にストローが詰まった映像が全世界で流れ、脱プラの動きが進んでいる。環境問題に対し、機械メーカーとして貢献できることはないかと模索していたところ、1年前にあるお客さまから紙ストローについてお問い合わせをいただき、開発に着手した」と話した。

STO－001は、給紙部の「リールスタンド」、のりと潤滑剤を塗布する「グルーユニット」、棒状に成形する「フォーミングユニット」、裁断を行う「カッティングユニット」といった構成。最大で毎分150本の生産速度を持ち、内径6～10㍉、長さ120～225㍉の紙ストロー製造を可能にする。

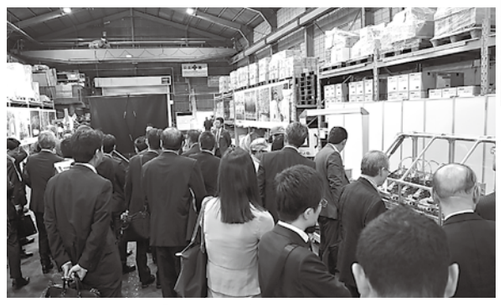
同社が選定した資材の耐水時間は約3時間となっており、のりはヘンケルジャパン㈱の水性接着剤「AQUENCE EPIX BC 900F」を採用。同粘着剤は「FDA」認証を取得し食品への直接接触でも安全性が証明されており、沸騰水や電子レンジなどにも対応している。

L&I営業課の熊谷威係長は「国産初の紙ストロー生産機であり、流行のタピオカドリンクにも対応可能。ターゲット層は限定しておらず、例えば、印刷会社が新たに紙ストローの製造を始めるといったケースも想定している。既に導入されているお客さまも、新規事業として8月から運用している」と紹介した。

当日はそのほか、ラベル向けオフセット間欠機「MLP10L」などのデモンストレーションも実施。裏面印刷に対応したフレキソや、開発中である熱ラミネートの各ユニットを紹介した。フォーム印刷機に搭載するモノクロのインクジェットユニットの改良モデルも披露。既存機にワンタッチで着脱できるようになり、氏名などの可変情報を毎分150㍍の速度で印刷可能と解説を行った。



宮腰亨社長



紙ストロー生産機「STO-001」（上）は毎分150本の生産性を持つ。多数の来場者がデモンストレーションを見学した

JAGAT

JAGAT大会を開催

テーマに「for business」加え

（公社）日本印刷技術協会（JAGAT・塚田司郎会長）は10月23日、文京区関口のホテル椿山荘東京で「JAGAT大会2019」を開催。会員企業ら145人が参加した。

塚田司郎会長

あいさつに立った塚田会長は、2019年の国内外の経済状況や景気動向などに触れつつ「印刷用紙の供給難やインキの価格改定と、紙メディアのビジネスが難しい一年だった」と印刷経営に関わるトピックを精査。そのうえで「開催テーマ『デジタル×紙×マーケティング』の通り、従来と違う紙メディアの価値を高める提案をしていく必要がある。新たにテーマへ『for business』を付したように具体的実例もでき始めてきたことから、これを共有してより深く掘り下げてる機会としたい」と述べた。

当日は複数の講演が企画され、このうち第2部では「実践！デジタル×紙×マーケティング＋AI」と題したディスカッションを実施。司会を郡司秀明JAGAT専務理事が務め、アビームコンサルティング㈱顧問の本間充氏とSENSY㈱代表取締役CEOの渡辺祐樹氏が議論を交わした。

「デジタルメディアの勃興で印刷媒体が減ったとの論じられがちだが、デジタルにもアキレス腱があり紙にもよさがある。これをハイブリッドしていくことをテーマにも掲げているが、一番のキモは『マーケティング自体が変わってしまった』ことだ」と本間氏は提起。

POSのようにいつ・何が売れたかは分かっても「誰が」を特定できなかった時代から、ロボットやAI、IoTが主体となる第四次産業革命は「個人が特定できる時代」とし「その〝誰が〟を特定するためのデータ加工に価値が生まれお金が落ちる。ネット広告もマス向けは安く、条件を絞ればその分高くなる。チラシやDM印刷についても、少量でも高い価値を生める」と明言して、DMの成功実例を複数詳説した。

感性工学のフレームワークに基づき「人の購買や消費に関わるような感情を分析する『感性解析』を得意とする」と自社紹介した渡辺氏は、同社ソリューションのうちAIを活用した力タログ販促に言及。同社AIに基づくパーソナライズDMにより「購買確率と購入単価が約1・5倍、売上が約2・3倍アップした。DM1枚が100円でも元が取れる結果となった」など検証事例を列挙、3者でこれからのマーケティングにおけるAIの運用利点や勘所、それに対する印刷の目的や役割を推究した。

当日はほかにも、すかいらーく創業者である㈱高倉町珈琲代表取締役会長の横川竟氏が「商売と経営～売れて・喜ばれて・儲かる」を題材に会社経営の真髄と本質を60分間熱弁。さらに当日上梓した「印刷白書2019」から、JAGATの藤井建人研究調査部部長が「印刷ビジネスの最新動向2019」と銘打って調査データを報告した。

ディスカッション以外に講演、調査報告と充実

JS

汐留大会と30周年に向け連携

フェルミ推定を学ぶ

全日本シール印刷青年部協議会（JS・山下圭三会長）は10月25日、滋賀県大津市浜町の琵琶湖ホテルで「第28回通常総会」を開催。全国の各協組から19人が出席した。

議長には山下会長＝写真＝が選出され、三浦弘貴副会長による司会のもと、会は進行。議案審議では、前年度の事業ならびに活動報告、監査意見書、収支予算案など（第1、4号議案）を承認した。第2号議案の役員改選では、山下会長以下副会長の留任がそれぞれ決定。次年度の事業計画案（第3号議案）では「各協組の情報共有や連携を密に図り、次回開催を予定している汐留大会や節目となる30周年大会に向けて、スムーズに準備を進めていきたい」（山下会長）と方針を定め、可決された。

総会後に行われた交流会では、明確な解答のない設問に対していくつかの手がかりを元に、ディスカッションやプレゼンテーションによって回答を導き出す「フェルミ推定」をデモンストレーションした。

参加者は4つのグループに分かれ、「日本のガソリンスタンド数」「救急救命の優先順位を決める『トリアージタグ』の世界流通量」「日本のPOPラベルの流通量」について議論を交わし、それぞれ回答を発表。各発表では、日本の総面積や自動車の保有世帯数、トリアージタグの販売先といった独自の見解を披露した。

このうちPOPラベルの流通量の設問では、同ラベルが多用されている化粧品や洗剤、飲料などの売上高のほか、ラベル市場の規模などが話題に上がった。

最後に山下会長はフェルミ推定を行った経緯について「補助金制度を活用して機材を導入したり、新規事業を始めたりする際、市場の規模を把握した数値を割り出すことが重要。フェルミ推定のように答えを導く術を会得し、新たなことを生み出すきっかけにしてもらいたかった。加えて、外資系のコンサルティング会社などでは、新人採用の面接で活用されている。ラベル業界でも参考にしてみては」と述べ、閉会した。

交流会のようす

エプソン

ピーラー搭載の新機軸

8㌢対応もカラーIJP2種発表

エプソン販売㈱（東京都新宿区新宿、鈴村文徳社長、☎03・5919・5211）はこのほど、千葉市美浜区の幕張メッセで開催している「JAPAN PACK2019」で、インクジェット（IJ）方式のカラーラベルプリンタ2機種4モデルを新たに発表。カラーIJプリンタでは世界初となる「ピーラー搭載モデル」や最大紙幅が8㌢のモデルをラインアップに追加した。

新機種は最大8㌢に対応する「CW－C6520A」と「同C6520P」、4㌢対応の「CW－C6020A」と「同C6020P」の4種（末尾Aがオートカッター、Pがピーラー）。

～～～